

体験版 下着モデル

「膝を抱えている手で

脚を開いてくれるかい。」

「えっ
」

「えっ じゃない 足を開くんだよ。がばっと」

今までしゃべらなかった会長が声を荒げた。

「はっ はい」

唯は思わず足を開いた。

M字開脚である。

【恥ずかしい　こんな格好・・・】

開いた足のすぐ先でふたりは食事をしている。

特に目の前は老人（会長）だ。

彼のすぐ先にパンティが隠しているとはいえ

女の子の一番恥ずかしい場所がある。

それから、ふたりは何も言わず黙々と食事をしていた。

カチャカチャとナイフとフォークがお皿に当たる音が響く。

それにワインを継ぐ音、くちやくちや咀嚼する音、

グラスを置く音・・・・・・・・

唯は脚を開いた姿勢のまま

ちらちらと食事する二人を見ていた。

しばらくそうしていた・・・・・・・・

唯はカメラのパイロットランプが気になった。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

男は執拗に唯の乳房を愛撫した。

ひとしきり胸を揉みしだくと

男は唯の胸からその手を離した。

男の手が離れると唯の乳房は

すぐに元の美しい形を取り戻す。

唯はやっと終わったと安堵した。

「はあ はあ はあ はあ」

唯は荒い息を整える。

次の瞬間、唯はハッと体をこわばらせた。

開いていた唯の脚の間に老人（会長）が入り込んでいた。

「あつ　そこは　だめっ」

老人はパンティの中央に走るクレバスに正確に指を走らせる。

唯は思わず手で老人を押しつけようとする・・・

だが後ろから鬼頭に抑えられてしまう。

唯の恥ずかしいクレバスからはすでに

恥ずかしい汁が溢れ出ている・・・

お尻の穴まで流れて・・・

「いやらしい娘じゃの

わしらのパンティこんなに汚しおって」

老人はパンティの上から唯のクレバスを何度もなぞり

その指先についたトロリとして

てらてらと光る粘液を唯の顔の前まで持っていった。

親指と人差し指を付けたり離したりして

その間につながる粘液の糸を唯に見せつけた。

「いつ いやあ」

「わしが貸し出した試作品をこんなに汚して」

その唯の愛液のついた指を老人はペロツと舐めた。

【やだ やめて・・・】

老人はまたクレバスをなぞり始めた・・・

「もう やめてください」

「どうしてじゃ　こんなにここは喜んでおるのに」

「いや　恥ずかしい　恥ずかしすぎます。」

「そうじゃの　恥ずかしい娘じゃの」

そういいながらも老人の指は止まらない。

「あつ　うつ　」

「ここか　ここがいいんじやろ」

唯はカラダをビクツと硬直させる・・・

老人は指先に見つけた突起の感触に

いやらしい笑みを浮かべる。

そして その突起を執拗に撫でまわす。

すっかり感じて・・・勃起して・・・

パンティの薄布を押し上げている小さな突起・・・

クリトリス・・・

更に男は指でクリトリスを捏ね繰り回す。

「あああっ　だめ　そこ　だめっ」

男はペニスでGスポットを突き上げながら

指でクリ攻めをする。

唯はあまりの快感に腰を浮かせてしまう。

「んんんんっ　あああっ　だめっ　逝っっちゃう　あっ」

唯は硬直し　びくびくと逝ってしまった。

「もう逝ったのか」

「いやあ　逝く　逝っちゃう」

「ああ　おまえのあそこがビクビクと

俺のモノを締めつけてきやがる」

さらに激しく鬼頭は腰を突き上げる・・・

「あああ　いや　逝ったから　逝ってるから」

更に腰の動きが激しくなる。

唯には休む間も与えられずに

次から次にオーガズムの波が訪れる・・・

連続絶頂だった・・・

「いやああ・・・もう 無理っ あああっ・・・」

唯は下半身がしびれる様になった・・・

頭の中が真っ白になってしまふ。

「あっ あうっ うっ うっ うっ うっ」

唯は視線が定まらなくなっていた。